

教 仁 名 聞

第 83 号
(発行日)

2017年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒 6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

生と死を平等に見る智慧

私が三十四才の頃、鹿児島県の串木野市で真宗門徒の研修会がありました。法話の後、座談会があり、さまざまな意見が飛び交いました。

その時に年配のご門徒の方が「阿弥陀様に生かされていることが有難い」と申されまして、なんでも疑問があったら口に出さずにはおれない性分の私は「今は生かされているから有り難いと言ってみても、やがて死ぬではありませんか」と発言しました。そうしたら、その方から「理屈を言うな」と叱責され、それ以上言うこともなく会は終わりました。でもその疑問はずっと続いていたのでした。

しばしば「私たちは仏様に生かされている、有難いことだ」という趣旨のお話をお聞きします。それはそれで結構なことなのです。「今元気でこうして生きておれることを喜び感謝する」、そのことが悪いというわけではありません。ただ、「生かされている私」

ということが、ややもすると「今日も、こうして元気でおられることは有難い。仏様のおかげだ」ということで喜んでいく場合、病にかかり、病が重くなって死が迫っているというような時に、「生かされていることは有り難い」と喜ぶことができるか、という疑問が起るのです。

それはともすると「自分にとって都合の良い状態になっていること」を喜んでいるのである、その喜ぶ心は功利的な自我心ではないでしょうか。もし「生かされていることは有り難い」と喜ぶことが、「死ぬことは不幸なことだ」という心と裏表であるならば、その喜んでいる心は功利的な自我心だといえましょう。

そんな中で仏法のお話を聞くようになって「生きておれることも結構だが、死なしていただくのも結構だ」と、おのずから受け取られての「生かされていることは有り難い」というのであれば、それは大

変結構なことでは。しかし「死ぬのは不幸だが、元気で生きておられるのは結構だ」というだけなら「都合の悪いことは来ないで、都合のいいことだけ来てほしい」という自我心からの見方でありましょう。

では一転して「生きておれることも結構だが、死なしていただくのも結構だ」などという見方は実際可能なのでしょうか。

法話などでこのような見方がよく説かれます。しかしそのような法話を聞いて「生きておられるのもいいことだが死なしていただくのもいいことだ」と自分に言い聞かせても、その場かぎりの思いや観念であって、実際的にはそのような感じないし、思えもしないというのが多くの場合の現

《 孟蘭盆会法要 》

八月十日 (木)

午後二時始まり

* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

* 八月十二日と八月二十二日の集まりはありません。

* 八月二日 (座談会)・八月六日 (聖典学習会) はあります。

実ではないでしょうか。自分がそういう教えなり思想なりを聞いて、実感としてすぐ感じるようになるかというところ、なかなかそうはいかないところ、に苦しみがあり悲しみがあります。「それが本當なのだろうけれども、そのようには実感できない」という壁にぶつかるのです。

ただここでもう一つ言えることは、真剣に聞いていかなこととそういう壁にもぶつかりません。「そうはいっても自分はどうしても感じられない、受け取れない」という問題(苦悩)にまで至りません。たいへいは、法話の時間がすむと、またこの世の損得や善し悪しのことで頭がいっぱいで、生と死についてつきつめて考えることはあまりありません。

心が前より明るくなることは皆さんがしばしば経験するところですか」

N 「それは分かっているのですが、工夫努力によつてしばらくは心が明るくなりますが、また何かにつまづくと暗くなつてしまいます」

D 「そうですね。自分にとつて都合の良いときは心が明るくなりますが、縁が来てまた不都合なことが起ると落ち込んでしまいますね。心は状況次第で明るくなったり暗くなつたして、状況に振り回されやすいですね」

N 「いつでも心が明るい生活はできないのでしょうか」

D 「そうはいかないのが心というものです。ですから煩惱具足の凡夫といわれるのです」

N 「自分の心はまことに不安定ですが、どこに安定があるのでしょうか」

D 「それはお念仏にあるのでしよう」

N 「なぜお念仏が救いになるのですか」

D 「明暗する私たちの心を越えた真実（真の实在）の働きにであうからです」

N 「心を越えた真実はどこにありますか」

D 「今ここに私たちとともにまします」

N 「もう少し詳しくおっしゃってください」

D 「心の明暗、起滅、そういう人の心の働きが、そこに（於て）起る、そういう場所としてすでに働いていくのださつている広大な真実のいのちの働きがあります」

N 「よく分かりませんが、私たちの心の働きや明暗も、その広大ないのちの働きに（於て）起るのですね」

D 「ええ、広大な真実は私たちの心の善し悪しや明暗を越えてまします。ですから私たちの心の中ではなく、私たちの心を越えていながら、しかも私たちの心と決して離れないまことです」

N 「それは阿弥陀仏といつていいのでしょうか」

D 「ええ、そうですね。阿弥陀仏は寿命・智慧・慈悲のおはたらきですが、私たちはその阿弥陀仏の大悲のいのちを離れていないのです」

N 「難しいですね」

D 「以前にも申しましたが、西田幾多郎博士の歌に

我が心 深き底あり

悲しみも 憂いの波も
とどかじと思ふ

と云うのがあります。私たち

の心の悲喜・苦楽・明暗の心の波も届かない、その底に阿弥陀仏（真の实在）がましますという事です」

N 「私たちの心の明るい暗いを超えた阿弥陀仏が今ここに私を抱いてくださつていてということですね」

D 「ええそうですね」

N 「でもやっぱり難しいですね。分かりません」

D 「ええ、ですから、そんな難しいことは分からなくても南無阿弥陀仏とお念仏を申し、ナムアマダブツと聞くばかりのところ、この阿弥陀仏にであうのです」

N 「お念仏において私たちの心の明るい暗いを越えた阿弥陀仏にであうのですね」

D 「ええそうですね。今ここに私たちの浮き沈みする心を越えた有難いお働きが南無阿弥陀仏の声となつて私たちに喚びかけておられるのです。ですからわたしたちはお念仏を申し御名を聞くばかりで、心の明暗を越えていく道が与えられるのです」

N 「心の明るい暗いを越えるというのは、私たちの心が暗くなつたり明るくなつたりし

なくなるということでしょうか」

D 「いいえそうではありませんせん」

N 「そうすると、心に明るい暗いがありながら、越えるのですね」

D 「ええ、そうですね。越えるというのには、私たちの心の明るい暗いによつて、壊れもせず、無くなりもせず、いつでもともにいてくださつて、私を受け取ってくださいつている阿弥陀仏、その阿弥陀仏にであうことです」

N 「真宗で煩惱が離れないままで救われるというのはそういうことなのですね」

D 「ええ、そうですね」

N 「煩惱妄念のまま、そのように阿弥陀仏に抱かれていく身であつたと知らされるといふことと、未来に浄土に生まれるといふことはどうつながるのですか」

D 「それは今ここで私を撰め取つて離れたまわらない大悲のまことが南無阿弥陀仏の仰せとなつて私に喚びかけておられる、そのお言葉を聞くことによつてです」

N 「そのお言葉とは」

D 「へもし生まれずば正覚を取らじ」の本願が成就して、（汝

を必ず生まれさせる）という本願成就の言葉となつて喚びかけて下さつて居るのです」

N 「南無阿弥陀仏を聞くといふことは（汝を必ず浄土に生まれさせる）との仰せを聞かせていただくことなのですね」

D 「ええそうですね。（浄土に生まれさせる）というお言葉によつて、（ああ、私を浄土に生まれさせて下さることよ。有難い）と受け取られてくるのです」

N 「まだ浄土を見もせず、未来のことなのにどうしてそのような言葉を信じていくことができるのですか」

D 「ナムアマダブツを聞くところに、今ここで阿弥陀仏に撰め取られており、私がどうなつても大悲の阿弥陀仏は私から離れたまわれないと感じられてきます。そこに南無阿弥陀仏の仰せである（未来はお浄土へ参らせる）との大悲心のお心がまことと感じられてくるのです。そのような今が続いて浄土に生まれゆくのですね」

N 「そうすると、仏様のお言葉によつて仏様のお言葉にまらぬと自然に受け取られるのですか」

D 「ええ、そうですね。阿弥陀

お便り

T・S氏より

T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの前月号よりの続きです。

大切なことは「よき人の仰

か」
D 「いいえ、起ることも勿論あります。しかし、疑いの心は起こっても、撰取したもう事実と如来の仰せの前には抵抗できないですね。疑いの心はどれほど起こっても、そんな心にもう用はなくなります。大悲のお心に反抗しきれず、疑いは敗退してしまいます」
N 「すでに撰取されているから疑いが起こっても、疑いは力を失うのでしょうか」
D 「ええそうですね。阿弥陀仏の大悲の撰取にあうと、おのずから阿弥陀仏の「汝を浄土へ連れて行く」というお言葉が大悲の力によって受け入れさせられてくるのです」

(了)



☆私思う。よき人のまんまに本願の仰せのまんまに「ただ念仏する」ことができぬのが我々凡夫の姿です。自分の心が納得できなければ信じられないのです。自我の満足がなければ信じられないのである。しかしこのことが迷いの元凶なのです。

自己のはからい離れて弥陀の本願が信じられたとき、自己の姿を絶対無能と深く信じし悲しむとき、弥陀の本願、弥陀の願心はこの絶対無能の私のためであったと心底に回向されるときはじめて信じられるのでしよう。そこに弥陀の本願の願心の不思議が現れるのでしよう。

その弥陀の願心の恩徳に気づくとき、弥陀の本願はこの私のためであったのかと驚きをもって体験されるのでしよう。

信心とはこの弥陀の恩徳がわが身に受け入れられた姿に他ならないのでしよう。法然上人が善導大師の「順彼佛願故」に涙せられ悟られたのも自己の無能に泣くとともに、この仏の本願願心に感じられた時節のことではないでしようか。智慧の法然房とまで云われたほどの天才が一文不知の尼入道と自身を自覚されたことは我々凡夫が自覚するのと天地の開きがあります。歎異抄全編、親鸞の自己の業の深さを嘆く悲しみとともに救い給う弥陀の御恩を喜ぶことに尽きております。

親鸞聖人いわく。御年八十六歳で「愚禿悲嘆述懐」に「浄土真宗に帰すれども、真

実の心ありがたし、虚仮不実のこの身にて、清浄の心もさらになし、……無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども、弥陀回向の御名なれば、功德は十方にみちたまう……」
これほど自己を深く見つめた聖人は未だかつてなかったのではないでしようか(続く)

【住職雑感】

*近代以前は社会や国家は与えられたものであり、運命であり、その仕組みを民衆の力で改変できるとは考えられないものでありました。ですから、そういう時代のお説教はヨーロッパでも日本でも、人に対して親切にせよ、困った人がいたら手をさしのべてあげなさい、などという個人倫理だけで倫理がとかれていました。しかし近世以後、社会体制は人々の力によって改変することが可能であることになりました。そこで仏教もキリスト教に遅ればせながら、社会倫理、共同体倫理が説かれるようになってきました。これは大事なことで、世界平和、環境保護、人権擁護、人種差別の撤廃など多くの社会問題に仏教も関わることになってきております。これは避けられない大事なことで、これから更に推進されるべきことがらです。なお、真宗

の話で、ややもすると社会の問題は真宗の信心の問題ではないと切り離して説かれる場合がありますが、これは間違いです。
ただしかし、阿弥陀仏との出遇いがどこまでも真宗の核であって、これがないとはや真正の宗教ではないことを忘れてはならないでしよう。

*今年四月より大谷派教団の大阪教区第八組という阪神地区寺院(三ツケ寺)で組長という役割が回ってきまして、事務処理の作業に結構エネルギーを注がねばならなくなりました。任について四ヶ月が過ぎましたが、教団の仕事は形式的な書類作成が非常に多く、その割に実質的な内容が随分乏しく、組織体というのはこういうことをしなくては進まないであろうかと嘆息してしまいました。(了)

【遠方法話予定】

*八月二十九日。名古屋市。高畑開法会館。十時から十二時半。法話座談
*九月九日。福井別院。十時より十二時四十分。法話座談。
*十一月四日。福井別院。十時より十二時四十分。法話座談。
*十一月九日。名古屋市。高畑開法会館。十時から十二時半。法話座談。
十二月九日・十日。姫路市。西源寺。午後七時より午後四時まで。
(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

木村無相さんの法信9